

市長講演

「雲南市の地域づくり」～市民と行政の協働のまちづくり～

島根県雲南市長 速水 雄一 氏

皆様、こんにちは。ご紹介いただきました島根県雲南市長の速水でございます。

私からは、「雲南市の地域づくり」～市民と行政の協働のまちづくり～と題してお話をさせていただきます。

私どもの雲南市は、お手元のレジュメにありますとおり平成16年11月1日に、ちっちゃな6つのまちが一緒になって誕生いたしました新生の市でございます。面積が553平方キロメートル、合併した時の人口は45,000人でしたが、8年経った今現在42,000人弱ということで、人口減少が見られる地域でございます。

合併は、人間に例えれば結婚でございますけれども、人間の離婚はしょっちゅうあり得ますが、この私ども6つの、6人からなる重婚の結婚はもう絶対離婚はあり得ないというか、できない。旧来の自治体の組織を壊して新しい自治体をつくり上げた結果の誕生でありますので、もうバックギアは無い、前へ前へと進んでいくしかないわけであります。そうした新しい雲南市のまちづくりをどうやっていくかということが合併以来、新しい市の誕生以来問われているわけであります。

この雲南市、雲の南と書きますけれども、島根県は東西に長くて東部を出雲部、西部を石見部というふうに、この出雲風土記という歴史書、古事記とほぼ同じ時期に編さんされた歴史書であります。ここに既に地名が出ておまして、平成の大合併までは出雲部の南、雲南地域に10町村ございました。その後、平成の大合併で1市2町になり、その1市が私ども雲南市です。6つのまちで構成されているということから、それまでの地域の名前をそのまま市の名前とし、雲南市として誕生したということでございます。

合併した当初は、今でもそうですけれども、東京あたりへ行きますと「中国の雲南ですか？」と言われます。中国地方の雲南ですから「はい、そうです」と言っているんですが、逆にイメージを強くしてしっかり覚えてもらおうという思いで今日まで至っております。

雲南市の人口動態でございますけれども、冒頭言いましたように右肩下がりということで、ずっと下がりっ放し。何とかこれにストップをかけなきゃいけないということは、当然市の政策として取り組んでいかなきゃいけないわけですが、2010年の高齢化率32.9%。これが、2020年になりますと40%になるものと見込んでおります。こうした状態を、全国、島根県と比

べてみますと、2010年の32.9%というのは全国平均と比べますと既に20年先へ行っている状況、島根県の10年先を行っている状況ということで、全国からすれば20年先の課題先進市ということになるわけでございます。

そうであるからには、高齢化率が高くても元気で頑張っている自治体の実現を目指し、全国から「そんなまちがあるのか、行ってみよう」というふうに思ってもらえる、そんなまちでなくてはならないというふうに思って、さまざまなまちづくりを進めようと今頑張っております。

高齢者1人を支えるのに必要な生産年齢の人口、これは2010年が1.7人で1人の高齢者を支えていたのが、2030年には1.2人で1人ということで、今、騎馬戦型から肩車型になろうとしております。それから後期高齢者、これは2.7人で今支えているのが2030年には1.7人。全国の流れも同じであります、いずれもその先を行っております。

そうした雲南市のまちづくり、では、どうやって進めていくかということでございますが、このことにつきましては、平成16年11月に誕生した雲南市でございますので、それに先立って合併協議会が設置されました。まず、平成14年4月に任意協議会が発足し、同年10月には法定協議会が発足し、そして平成16年11月1日に雲南市が誕生したわけです。

この合併協議会発足以来、2年と半年余りかけて考えたまちづくりのテーマが「^{いのち}生命と神話が息づく 新しい日本のふるさとづくり」であり、そしてまちづくりの手法は、6町からなる雲南市でありますので、できるだけ早く雲南市の一体化を実現しようということでもございました。

なぜ、「^{いのち}生命と神話が息づく 新しい日本のふるさとづくり」かと言いますと、私どもの市の真ん中を東西に1級河川「斐伊川」が流れております。この斐伊川は、ヤマタノオロチ伝説、スサノオノミコトがヤマタノオロチを退治した神話でありますけれども、その神話のステージになっているところでございます。したがって、神話に出てくる地名が今もこの流域にそのまま残っている。その後現れるオオクニヌシノミコトや、それにまつわる神話はその後からの話でありまして、オオクニヌシノミコトが祭られている出雲大社、これは私どもの隣の市の出雲市にあるわけでありまして、古代出雲文化の発祥地は私ども雲南市の地域だということで、「古代出雲文化発祥の地＝古代日本文化発祥の地」、そういう自負を持ってまちづくりに取り組んでいこうということから、「^{いのち}生命と神話が息づく 新しい日本のふるさとづくり」となったのです。

先ほどの蓑茂先生のお話にも、地域のブランドというお話がありましたけれども、私どもはそうした、「雲南市といえば日本のふるさと」と、まず住んでいる市民が自負することができ、

そして日本中の人々が、本当に昔からの日本の良さを今に伝え、将来にそうした自負、誇り、自信を生かしていこうとしているまちだなど、そういうふうにも思ってもらえる、そんな雲南市づくりを目指そう、そうした時に、雲南市としてはそういうまちづくりを進めていくに当たって何が地域の宝かということ、この合併協議会の時にもさんざん考えました。

そして、宝、幸、恵み、何が自慢できるかというものをピックアップした結果、「笑顔があふれる地域のきずな」、「世代がふれあう家族の暮らし」、私どもの雲南市では3世代同居率が約37%ということで、本当に3世代家族あるいは4世代家族が多くございます。そうした地域はなかなか無いだろうというふうにも思っております。そして、「新鮮で安全な食と農」、「多彩な歴史遺産」。先ほど言いましたように神話あるいは神楽、そうした本当にそこかしこに社中がありますけれども、お祭りの時には神楽の舞がありますし、民謡がありますし、そうした多彩な歴史遺産がある。そして、「美しい農山村の風景」がある。そうした5つの幸に恵まれている。その5つの幸をピックアップしました。

そして、そうした5つの幸の中から特にこれを自慢していこうということで取り上げたのが、食の幸、人の幸、自然の幸、歴史の幸、これを生かした雲南ブランド化プロジェクトを進めていこう、このことによって雲南市そのものをブランド化しようという結論に至りました。

豊田市といえばトヨタ自動車の本社があるところ、京都といえば日本の最も古い都とピンとくるわけですが、「雲南市といえば」と言った時に、繰り返しになりますが、「日本のふるさと」とイメージされるようなまちづくりを目指して頑張ろう、そして、そのことによって住んでいる市民の皆さんが、自分たちは本当に雲南市に住んでいて幸せだ、「幸運なんです、雲南です」というふうにも思えるような、そんなまちづくりをやっていこう、そう思ったわけであります。

では、どうやってそれを実現していくかということでございますけれども、11ページをご覧ください。これは人口、例えば5人が1人減って4人になりますと、人口5人の時にはネットワークが10本、それが4人に減少しますと、ネットワークが6通りになってしまいます。これは、人が少なくなるとこういうふうにつながりが少なくなる、その結果、地域の崩壊にもつながっていく。これを何とかするためには、やはり組織化をしなきゃいけないということで、いってみれば連合自治会、これを地域自主組織という組織に変えていこう。そして、17ページですが、その拠点を公民館にしよう。今も公民館はどここの地域にもあるわけでありましたが、今までの公民館は、ご承知のとおり戦後間もなく小学校区単位に設置されました。そして、公民館長さん、主事さんがおられます。この公民館長さんは自治体、市が任命します。主事さんは市

が、あるいは公民館同士でつくっている連絡協議会が任命されることもあります。公民館を拠点にその地域自主組織が活動するというのに併せて、公民館というものを交流センターに名前を変えよう、同時に、市が任命していた公民館長さんはセンター長さんと名前を変えよう、主事さんも交流センター主事さんとしよう、その任命は、今まで市が任命していたけれども、交流センター雇用協議会が任命しようということで、平成22年度から公民館を交流センターという名前に変えてスタートいたしました。

したがって、雲南市には今公民館はございません。そして、地域自主組織は、これまでの公民館である交流センターを拠点にすると同時に地域自主組織の役割を明確にしました。公民館は生涯学習の拠点であるわけですけれども、公民館の実体は既に生涯学習だけではなくて、生涯学習のほかに地域づくり活動も福祉活動もやっている拠点になっております。これは全国どこも同じだと思います。であれば、そういう活動は、これまでの館長さん、主事さんだけに任せるのではなくて、地域自主組織全体でやっという活動をするために、地域自主組織が今存在しております。

その結果、雲南市内には29の交流センター、42の地域自主組織、これは一つ例外がありまして、一つの交流センターだけは14の地域自主組織が合同の拠点となっておりますので、29の交流センターを拠点に42の地域自主組織が地域づくり活動、福祉活動、生涯学習活動を展開しているという状況でございます。これが雲南市の全容でございますけれども、全市にまたがってそういう組織がございます。

19ページをご覧ください。これは、そうした地域自主組織活動の活動例でありますけれども、「躍動と安らぎの里づくり鍋山」というところでは水道の検針をしています。それから、年賀はがきの発売とか可燃ごみ、不燃ごみの袋の販売とか、そういうコミュニティービジネスもやっています。

また、「中野の里づくり委員会」というのは、JAさんの空き店舗を活用して毎週木曜日に地産地消、100円市、これを展開していらっしゃいます。そしてまた、既に地域の人が寄り集まって歓談ができる、そういった場所も用意していらっしゃいます。

25ページをお願いします。合併直後と現在、このことによってどういうふうに状況が変化したかということでございますけれども、今言いましたように地域自主組織が全地域に結成された、そのことによって、各地域地域で自分たちの地域の地域課題というものを探し出して、それを解決する形で自分たちの地域は自分たちでやろうという状況になっております。今、交流センターを拠点にと言いましたが、その基は公民館であります。公民館は戦後間もなく各小学

校区単位に1つずつ設置されました。ということは、今の公民館、交流センターは昭和の大合併前の自治体に1つずつある。全国どこでもそうだと思います。そうすると、地域づくり地域づくりと言うけれども、その地域の広さはどの程度が一番いいんだろうといった時に、やはり昭和の大合併前の、戦後間もなくの基礎自治体の広さが一番いいんじゃないかなというふうに思っております。そのことは、つまりどこに誰それが住んでいる、いわゆる顔が見える範囲であり、自分たちの地域だと実感でき、それを中心に地域づくりを進めていく。

今、雲南市はそういう考えでやっておりますけれども、たぶんこれから特に地方の中山間地域と言われる地域では、そうした公民館を中心としたエリアでのまちづくり、地域づくりが進んでいくのではないかと、こう思っておりますが、先ほど水道の検針あるいは年賀はがきの販売、こういったお話をいたしましたけれども、中にはですね、行政の仕事も引き受けたいという地域自主組織も出てまいりました。もちろん、その交流センターに公務員以外の職員がそれをするというわけにはいきませんので、公務員の身分を持った方が市役所から派遣されるとか、あるいは嘱託の公務員をそこに置いて、そこにオンライン端末を置いて印鑑証明とか住民票とか、そこに来られれば、はい、どうぞと渡すことができる。

元々、各地域には役所、つまり役場があったわけですが、昭和の大合併によってちょっと遠くなった。平成の大合併によってもっと遠くなった。中心部と周辺部という意識がだんだん強く認識されるようになった。実際に今の住民票とか印鑑証明とか、そういったものを取りに行くのは本当に不便です。ですが、交流センターでそういったことができるようになれば、本当に住民サービスの向上につながっていく。そういうことで、今雲南市といたしましては総務省に小規模多機能自治というものを特に意識して、スーパーコミュニティ法人の設置を求めているところであります。

14ページに戻ってください。これの右端に小規模多機能自治、これを標榜した取り組みをやっておりますけれども、既に伺いますと、岡山県の方ではRMO（リージョナリー・マネジメント・オーガニゼーション）、地域でとにかく何でもできるような組織を目指そうという取り組みが始まっているというふうに伺っておりますが、大変すばらしいことだというふうに思っております。

今後、雲南市といたしましては、平成25年度以降、交流センターで働くセンター長さんや主事さんは、地域自主組織が任命できるように変えていきます。そして、今後は、市と地域自主組織と議会が、同じテーブルで地域の課題を話し合っって共通認識を得た上で、それぞれが果たす役割を認識し合っってまちづくりに取り組んでいこうということで、これを「円卓会議方式」

と名づけました。そうしたまちづくりを、これから試行錯誤しながら雲南市の地域づくり、行政と市民の協働のまちづくりを進めていきたいと思っ
て頑張っているところでございます。

以上でご報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。